

2025年1月発行

茨木御堂
第299号



真宗大谷派

 茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに原真いがかけられている

ラグビー教室



如来在す

まします

案ずるに及ばず

(清澤満之の言葉)

新年、明けましておめでとうございます。二〇二五年(令和七年)の元旦を迎えました。

昨年(令和六年)の一月一日は、能登半島で大きな地震がありました。輪島市や羽咋郡志賀町では最大震度七が計測されるなど、大きな被害がありました。人的被害では、災害関連死の方を含めると四六二人の人が亡くなったとのことでした。

真宗王国と言われる能登地方での地震であり、多くの寺院やご門徒様も、被害に見舞われました。その苦しみや悲しみは言葉では言い表せないものがあるでしょう。テレビなどの報道を見ても、その被害の大きさに目を覆いたくなるような場面も多々ありました。しかし、そのような中でも、悲しみや困難を乗り越えて立ち上がり、前に向かって生きていこうとする人々の姿勢を感じました。まわりの人に手をさしのべ互いをいたわりながら、ともに歩んでいこうとする姿も目にしました。浄土真宗を生きた人たちの底に流れる精神の強さに感銘を受けました。私たちの人生は、何が起るかわかりません。何が起れば、これまでの生活や心の持ち方が一変します。苦しみや悲しみが覆われます。自分だけではありません。周りの人々もすべて同じです。そしてそのような苦しみに出遇うとやけくそになります。一方、生活の中で考えややり方の違う人と出会ったり、困難な仕事や事柄が降りかかってきたりすると、疑いや迷いに苛まれます。

このような苦しみや悲しみに悩む私たちを救うと誓われたのが如来の本願です。この本願によって回向された南無阿弥陀仏と如来の真実信心に帰依して、どのような困難の中でも立ち上がり、本願を生きる者となることです。「如来在す、案ずるに及ばず」と心を決め、何がやってきたとしても、如来の本願と、念仏に込められた不可思議功徳を念じ、如来にまかせて前に向かって歩むことができます。往生浄土の道を歩む私たちの人生なのではないかと思えます。

南無阿弥陀仏 輪番 河原 恵

茨木別院関連ホームページ

真宗教団連合ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

<http://www.shin.gr.jp/>

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合

検索

茨木別院 月行事ご案内

● 修正会 (しゅしようえ)

- ・ 日時 元日(水) 午前〇時半頃より
- ・ 除夜の鐘が撞き終わる頃

- ・ 会場 茨木別院会館

● 本山九日講初講・九日講総会

- ・ 日時 九日(木) 午前十時より
- ・ 講師 真宗大谷派参務

- ・ 会場 茨木別院会館「初講に引き続き総会を行います。」

● 親鸞聖人御命日・婦人会報恩講

- ・ 日時 二十八日(火) 午後一時半より
- ・ 講師 茨木別院輪番

- ・ 会場 茨木別院会館

* 一月一日(水)～五日(日)までの月の月忌参りは、お休みさせて頂きます。

● 教如上人ご命日・同朋会(どうぼうかい)

- ・ 日時 五日(水) 午後一時半より
- ・ 講師 加藤恵師

- ・ 会場 茨木別院会館

● 本山九日講

- ・ 日時 九日(日) 午後二時より
- ・ 講師 茨木別院輪番

- ・ 会所 教行寺

● 親鸞聖人ご命日・婦人会例会

- ・ 日時 二十八日(金) 午後一時半より
- ・ 講師 茨木別院輪番

- ・ 会場 茨木別院会館

● 宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年 立教開宗八〇〇年
大阪教区慶讃法要団体参拝のご案内

二〇二五年四月に難波別院にて慶讃法要がお勤めされます。その法要に大阪教区の各別院門徒による団体参拝が予定されています。この機会にみなさまお誘いあわせの上ご参加ください。

◆ 日時 四月二十日(日)

午後二時から 午後四時三〇分

◆ 会場 難波別院

※参加希望の方は茨木別院までご連絡ください。

◆ 電話 〇七二一六二二一 二九〇三



慶讃法要とは
宗祖親鸞聖人がか生まれになって850年、浄土真宗が開かれて800年を慶び讃える法要です。

4/19は大谷裕新門、4/20は大谷暢裕門首のもと法要が動きます。

<p>◆ 4/19 御直修</p> <p>大谷 裕新門</p>	<p>◆ 4/20 御親修</p> <p>大谷 暢裕門首</p>
---------------------------------	----------------------------------

慶讃法要期間中の事業

- 南御堂市 (4/17～4/20)
- 社会・人権部パネル展 (4/17～4/20)
- ちいもの華「仏華展」(4/17～4/20)
- 慶讃供茶と南御堂茶会 (4/17)
- 帰敬式 (4/19 10時30分～)
- 子ども出仕 (4/19・20)
- 参堂列(庭儀・推見行列) (4/20 12時30分～)
- 難波別院本堂等修復奉告法要 (4/20 14時～)

法要と共に、講師をお招きし法語を行います。
ライブ配信も予定しております。

<p>4/17(木)</p> <p>午後2時～午後4時30分頃</p> <p>講師 吉岡大谷風前司</p> <p>川村 妙慶氏</p>	<p>4/18(金)</p> <p>午後2時～午後4時30分頃</p> <p>講師 大谷大学宗務講師</p> <p>山田 恵文氏</p>
<p>4/19(土)</p> <p>午後2時～午後4時30分頃</p> <p>講師 作家</p> <p>高橋 源一郎氏</p>	<p>4/20(日)</p> <p>午後2時～午後4時30分頃</p> <p>講師 大谷大学学長</p> <p>一楽 真氏</p>

※法要の進行状況によって終了時間が若干変更される可能性があります。あらかじめご了承ください。



園の子どもたちへ

いばらき大谷学園



新年あけましておめでとーございませう。本年もよろしく
お願いいたします。

十一月末から急に冷え始め、「水道から氷でてる！」(実際には出ていません)という声が聞こえてくるようになりました。☆作品展・今年度はオリンピックピックをテーマに各学年で試行錯誤しながら作品を作りました。難しいテーマの中、夏期オリンピックやそれぞれの競技の話聞いてイメージを膨らませていきました。個人立体も絵画もみんな一生懸命取り組んでいました。万国旗は全員一点ずつ作りました。年長組は様々な国の国旗を見て、実際にある国旗から選んでちぎり絵をしました。そのほかの学年は架空の国旗を作り、カラフルな万国旗となりました。廃材を集めるご協力もありがとうございました。

☆音楽会・十二月十九日にクリエイティブセンターで音楽会を行いました。いつもと違ったホールで緊張も見られましたが、きれいな歌声や一生懸命練習した合奏を披露してくれました。フィナーレでは幼児組全園児で『ともだちになろうよ』を歌いました。楽しそうに歌っている姿が印象的でしたね。たくさんさんの保護者の皆様に観覧していただき、子ども達もとっても嬉しそうでした。仕事の都合をつけていただいた方も多いと思います。ご声援やたくさんさんの拍手をありがとうございます。

今年度も残り三カ月となりました。異年齢児と交流を増やしたりしながら進級するイメージを少しずつ持つてもらえたらと思います。幼児組はおゆうぎ会に向けて楽しみながら頑張っていけます。

主任教諭 福井典子

好奇心いっぱい毎日

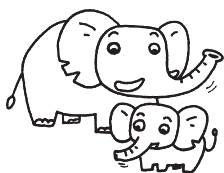
保育教諭 下原ひとみ

今年度、0歳児クラスを担当しています。四月当初は赤ちゃんだったみんなが、それぞれに大きくなり好奇心いっぱいの毎日を送っています。

ある時は、ティッシュペーパーの箱から果てしなく引き出してみたり、棚の中が空っぽになるまで絵本や玩具を取り出したり、水道の蛇口を全開にひねってみたり。大人が考えつかない、困ってしまうような、とんでもない実験を始めます。

その行為は、子どもたちが自分の手や全ての感覚を使って世界の認識をしていくための大事な活動だと思っています。とはいももの、ある程度のルールは必要です。

園の生活では、一人一人の子どもの「やりたい」気持ちを、常に一〇〇パーセント満たすことはできないかもしれませんが、だからこそ、「この子は本当に楽しんでるのかな?」「今日は泣くけれど、何かあったのかな?」などこの子は、今何をしてほしいのかということを常に観察して、子どもの気持ちに共感することが大切だと思っています。



令和六年 茨木別院報恩講 速夜法話

「願生道」

講師・中山量純師

(真宗大谷派解放運動推進本部
本部委員)



○念仏を慶べる身となりえているか

本日は「願生道」というテーマを立てました。この「願生」とは願生浄土という、まさに親鸞聖人の仏道そのものの名のりです。

私は大谷大学に十年間お世話になったのですが、昨年、この茨木別院の報恩講でお話をされた延塚知道先生のもとで勉強させていただきました。毎日のように、願生浄土という親鸞聖人の仏道を、身をもって教えていただきました。だから、親鸞聖人の教えを理解することに一生懸命になるのではなく、先生のように、親鸞聖人の教えを慶べる者でありたいと思い、親鸞聖人の願生浄土という仏道を、私自身が生活の中で身を尽くして生きる者になっていくだろうか、私にとって「道」となっているのかということ、これを今も私自身を問う課題であります。

○いのちがけの聴聞

本日お話をする上で、昨年延塚先生のご法話が本になり東本願寺出版から出ていると聞きましたので、道中で読

んできました。あらためて、本当に先生の仏道というのは、親鸞聖人に出会い、その身を尽くしたいのちがけの念仏であったということをお伝えされました。昨年はお連れ合いさんとの別れもありまして、私も葬儀にお参りさせていただきました。大学の頃、特に大学院生はお金がありませんでしたから、たまに先生の家へ呼んでいただき、御飯をご馳走になったこともありまして、お連れ合いさんにもたいへんよくしていただきました。ですので、昨年八月にお浄土に還られたと聞いて驚きました。先生の様子が気がかりなこともあって葬儀に行くと、先生は「よう来てくれたね」と笑顔で迎えてくださいました。そして、本の中にも書かれていましたが、最後の最後まで先生は、お連れ合いと一緒に半年以上、親鸞聖人とお念仏の話をし、そしてその日を迎えられたと葬儀の時にも聞かせていただきました。その時、先生をはじめご遺族お一人一人まで、下を向かずにまっすぐに立って、本当に真宗の教えということに生かされたんです、ということをお話してくださいました。先生もお連れ合いも、本当に偉い人だと思います。

今日来るまでにいろいろと話を考えてきましたが、このような先生の話を思い出して感動することと同時に、小手先ではだめだ、いのちがけで仏教を勉強しなさいと叱られたような思いになりました。真宗の教えが響き合う場には、人間の理屈は間に合いません。真宗の教えを親鸞聖人の言葉借りて丁寧な解説することはできるのかもしれない

ん。でも、本当に生きるとか死ぬとか、自分の身のあり様が問われる現場に立った時には、そんな理屈を言っている間に合わないのです。私自身が、本当に親鸞聖人の教えを、そしてお念仏を慶べる身になっているのかという現実の身に立ち上がる問いの前では、いのちがけの聴聞しかないということ、昨年は二回にわたって教えられました。一つが延塚先生のお連れ合いのご葬儀です。そして、もう一つが、私自身の子どもの別れでした。

○なかつたことになるいのち

昨年、まだお腹の中にいた子どもがお浄土に還りました。病院の方が20cmほどの小さな箱に布団をしいて、その上に子どもを寝かせて連れてきてくれました。ごめんね、という言葉もじっくり来ていませんでしたが、ごめんねとありがとうという二つの言葉をかけずにはおれなかつたことを覚えています。

病院の先生から、三カ月を過ぎたら流産ではなく死産になり、死産届を区役所に提出しなければならぬと聞いたので、私が出しに行こうとしたとき、連れ合いが「母子手帳はどうしたらいいだろう」と言うので、それも私が一緒に区役所に持っていきました。死産届が受理され、母子手帳についても職員の方にたずねると、「謹んでお悔やみ申し上げます。母子手帳については回収してないので、どうぞお持ちになってください」と言われ、私は何の気もな

く受け取って帰りました。待っていた連れ合いに話をする時、「なかつたことにされる。シュレツダーだ」と漏らしました。その言葉が、私は頭を殴られたようにショックで、今も忘れられません。

日本では、命が生まれてくれば、戸籍や住民票ということで行政的に人間の存在を証明します。そういったものがその子にはなく、死産届がそのまま受理されるのです。そうならば、母子手帳も何の手続きもなく返されるわけです。これは善し悪しではなく、手続きとしてそういう仕組みになっているということです。ただ、そのように母子手帳を返されたとき、その命は「なかつたこと」になる。お腹の中で確かにいのちが生きていたということ、その身をもつて、連れ合いは知っていたわけです、生きていたということ。だからこそ、返されたという事実がたまたまなく悔しかつた。一枚の書類がシュレツダーにかけられる。いのちというのはそういうことではないでしょう。人間一人が生まれてくるといふことはそういうことじゃないと、連れ合いの言葉にはつとさせられて、その時に「わかつた。法名をつけよう」と決めました。

○いのちに帰る名のり

確かにそこに生きていた命に名前をつけ、いのちに帰っていく法名をつけました。法名とは仏弟子としての名のり

ですが、そのとき、私もあらためてその意味に気づかされたように思います。それは、私たちの名のる法名というのは、「南無阿弥陀仏」という無量寿のいのちに帰る名のりなのです。

私たちはこの世に生まれてきたら名前を名のります。名前は必ず身を持っていきますから、最初はいただいた名であつても、いつの間にか「私の名前」「私の命」と主張し、「私」ということを中心に生きていきます。しかし、本来のいのちということとは、無量寿・無量光という無限の關係存在の中にあります。だから、關係存在を生きる者になるという表明として、法名を名のるのです。「私」の命、「私」の人生だから私の勝手に生きるというあり方から、「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずということなし」という『歎異鈔』に説かれる宗祖の言葉のとおり、勝手するところがなく、生かされて生きるいのちをいただいていることの表明です。ですから、いただいたいのちを、關係性を離れて「私」のものにせず、法名を名のり、いただいたままに關係性の世界・浄土に帰し、全く手放して浄土を生きるものにさせていたたく。だからこそ、法名は「釋」という仏弟子の名のりなのです。

この一年、毎月の命日に家族でお参りをしてきました。あのときにシュレッダーにかけられて途絶えたように思われた命が、私たちの關係性を支える「南無阿弥陀仏」として、私たちを生かしています。いのちをいただき生かされ

ているということ、法名の名のりと毎月の仏事を通して、確かめさせていただいています。

これは日常の御給仕もそうだと思います。お仏供をお供えする、仏華を立てていく。そういった時に私が飾り立てるのでなく、米一粒にしても自然の中に育みたいのちを私はいただいている。そのいただいたことをそのままにすれば、私が作ったというところに留まってしまいますから、そうではなくいただいたものをお仏供という形でもう一度、浄土に帰していく。それが願生浄土という仏道の具体的な実践だと思えます。

○「いちにん一人」を聞く

私自身が親鸞聖人の教えを慶ぶ身となりえているのかという問いは、私が現在所属している解放運動推進本部という場所においても、そこで出会う人たちから問いかけています。大谷大学を離れて今の仕事についてから八年程になりますが、ここでは様々な差別・偏見ということに苦しむ人たちとの出会いがあります。私が大学で学んでいた時には、本当に恥ずかしながら気に留めていなかったように思います。もちろん、社会の中に差別があるということとは知っていました。しかし、それがどうということなのか、本当の意味で分かっています。それがどうということなのか、本当の意味で分かっています。それは「聞く」という

勤めるようになり、最もしてきたことは「聞く」ということです。差別・偏見で苦しむ人たちの中に入り、その訴

えの声を聞く。ハンセン病の療養所に行き、回復者と出会い、部落解放運動に取り組む人たちと出会い、北海道へ行き、アイヌの人たちと出会いました。最初は相手にされませんでした。今思えば当然です。相手は私を「京都から来た人」「東本願寺の人」と見て、私は相手を「ハンセン病の人」「解放運動の人」「アイヌの人」と見ていました。しかし、その歩みを重ねていくと、お互いの名前が分かってくる。そこで、「〇〇さん」と呼びかけると、「中山さん」と返してくださいます。当たり前のことかもしれませんが、これこそ私がこれまで気に留めていなかった、真宗の仏道の原点なのだと思います。

たとえば私たち真宗門徒が依りどころとする浄土三部経の中に、『仏説観無量寿経』という経典があります。その中には「念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」(『真宗聖典』一四頁)とあります。念仏する人びとを撰め取って捨てないという、『観経』における仏の誓いが説かれています。また、宗祖の御手紙や蓮如上人の聞書の中には「同朋」という言葉があります。私自身も大切な言葉の一つとしてこれまでも聞いてきました。この「衆生」や「同朋」といった言葉を意識するとき、私は「みんな」「あらゆる人びと」といった意味をあてて理解してきました。しかし本心に、経典の教える「衆生」や宗祖の言われた「同朋」ということを聞いたことになっていったのかと、解放運動での出会いを通して思わされたのです。

つまり、「みんな」とひとくくりにしたことで、そこに生きる「一人」を見失っていたわけです。人が生きるというとき、「みんな」を生きているというのではないでしょう。誰もが身をもっていますから「一人ひとり」を生きている。その中に差別という現実問題があるのです。だから、『歎異抄』に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」といわれるところの「一人」は、一切衆生を包んだ親鸞聖人の自覚として、個人を超えています。そういうことを言葉として知っていたのですが、意味としてわかっていたいなかった。

だから、差別問題も社会問題の一つとして、他人事にしてきたのだと思います。本当はそんなことはなく、「そくばくの業をもちける身」として無量寿・無量光というのちを、一人ひとりが生きている。そこには何の区別もない「一人」の目覚めがあるわけです。それは、無限のいのちから生まれながらも、どうしようもなく人間であること、目覚めでもある。だからこそ、人間のまま、たまわったいのちをたまわったものとして、お念仏を帰していく。そのことを、親鸞聖人の教えに、先生の聴聞の姿勢や被差別の当事者との出会いを照らし合わせて訪ねていく。それが願生浄土を道として歩むということではないかと思えます。そのことを少しでも、皆さんと共有できればと思います。ありがとうございます。

(完)

〈令和七年度

(二〇二五年度)年回表〉

- 一周忌 令和六年亡
- 三回忌 令和五年亡
- 七回忌 平成元年亡
- 十三回忌 平成二五年亡
- 十七回忌 平成二二年亡
- 二十五回忌 平成一三年亡
- 三十三回忌 平成五年亡
- 五十回忌 昭和五一年亡
- 百回忌 大正一五年亡

※年忌法要は、なるべく二ヶ月前までに御来院いただいで日時等ご相談下さい。

〈須弥壇納骨に関するお知らせ〉

●本堂修復工事に伴い本堂の使用が出来ないため、修復工事完了まで須弥壇納骨の募集を一時中止させていただきます。須弥壇納骨の利用を考慮しておられた方には、ご不便をおかけしますが工事終了までしばらくお待ち下さい。

●墓地のお参りに関しては、変わりなく利用していただけます。車でお越しの際には、境内地の駐車ができない場合があります、ご了承ください。

●合祀納骨に関しては、引き続き受け付けております。

お問い合わせ 茨木別院事務所

〇七二・六二二・二九〇三

敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

● 法名 心光院釋尼芳敬

俗名 西島ハルエ

九十四歳

● 法名 無碍院釋尼智照

俗名 岡村千代子

八十八歳

茨木別院 本堂諸殿修復計画のご報告

- ◆二〇二四年十一月 本山より本堂諸殿修復計画の工事許可が認証される。
 - ◆十一月 施工業者と契約締結する。
 - ◆小堀仏具店により、本堂内陣の御莊嚴(仏具)の撤去作業開始。
 - ◆二〇二五年一月 金剛組により、工事仮設事務所の設置。
 - ◆二月中旬 本堂素屋根組工事開始。
- 進捗状況については、その都度ご報告します。

編集後記

本堂工事の実施にあたり、ご本尊・阿弥陀佛像と教如上人のご木造は、会館の仏間にご安置いたしました。これから本堂修復完了までの間、会館を仮本堂として、法要・ご法事のお勤めをいたします。ご門徒の皆様にはご不便をおかけすることになりますが、ご了承くださいますようお願い申し上げます。

竹内明人

株式会社 花 廣

— 生花・供花・けいこ花 —
 茨木市大手町一二一八
 ☎〇七二・六二二・二四〇二